

雷下遺跡第5貝層出土土器の再検討

－茅山上層式を中心に－

太田敬宏

はじめに

雷下遺跡は市川市の北部、北国分七丁目1127番地に所在する。遺跡は堀之内貝塚の眼下に広がる道免き谷津と国分谷の合流部に位置し、国分台に接する埋没谷を埋積するように形成された低地遺跡である。縄文海進期に堆積した海成層の標高 $-2.0\text{m}\sim+2.5\text{m}$ の層厚を伴う、9枚の貝層が検出されている。それぞれの貝層及び間層からは縄文時代早期後葉～末葉を主体とした多様な考古資料がまとまって出土した。

この時期の低地の貝塚は類例が極めて少ない。また、出土土器は茅山上層式から所謂下沼部式が主体となるが、台地上の遺跡を含めて県内において類例はほとんどない。

本稿では、雷下遺跡から出土した土器のうち、その主体である第5貝層出土の茅山上層式土器を中心に見ていく。その中でも特徴的な、貝殻腹縁文を施す土器と円孔文を施す土器の編年における位置づけを目的として、該期の良好な資料が出土し、編年の指標とされる神奈川県横須賀市吉井城山貝塚の主体となる層位と比較し、検討を行う。

1 研究略史

縄文時代早期後半から前期初頭にかけての時期は条痕文系土器と呼ばれる、胎土に繊維を含み、おもにハイガイ・サルボウなどの放射肋をもつ貝殻によって器面を施文する土器が使用される。

この土器群は山内清男達による縄文時代最古の土器を追求する中で早くから注目されてきた。戦後には「茅山式土器は赤星直忠・岡本勇両氏の詳細な貝塚調査によって、層位的型式学的見地から野島式、鶺鴒台台式、茅山下層式、茅山上層式の4型式に細分されてきたが、その型式編年の正当性は資料の増加した今日的にも、不動のものとして証明されている」（金子1991）と言われるほど早くから編年研究が進んだ土器群であった。これらのうち、野島式、鶺鴒台台式、茅山下層式についてはその後の資料の増加に伴い、それぞれ

細分型式が提示され検討が進められてきた。

茅山上層式は金子直行や野内秀明による論考がある。ともに茅山下層式から茅山上層式の新段階にかけての変遷を扱い、詳細な分析検討がなされている。この中で金子は、茅山上層式には茅山下層式の系譜を辿るものと、東海地方の連続刺突文系土器の影響を受けたものがあると述べている（金子1991）。野内は、粕畑式の影響下で急速に変容した土器群であると述べ（野内2001）、共に東海地方からの影響を指摘している。

一方で、関東地方における茅山上層式以降の早期末葉段階は、資料が乏しく変遷が不明瞭であり、後続する打越式との間には空白が生じている。その時間的空白を埋めるべく安孫子昭二によって下沼部式が提唱されたが、現在でも一型式の設定が可能かどうか決着をみない。

2 吉井城山貝塚出土の土器（第1図）

横須賀市吉井城山貝塚は3つの貝塚から構成される。古くから所謂茅山式土器が出土することで知られ、茅山貝塚と同じく注目されていた。幾度も発掘調査が行われ、1962年に赤星直忠・岡本勇によって報告書が刊行されている。特に第一貝塚の下部貝層中から、茅山下層式から茅山上層式にかけての良好な資料がまとまって出土している。茅山式土器について岡本は、a条痕のみのもの、b条痕を文様化したもの、c隆帯文をもつもの、d凹線文をもつもの、e刺突・列点文をもつもの、f沈線による文様をもつもの、g貝殻文をもつもの、h縄文を有すもの、i爪形文をもつものの9種に分類しており（赤星・岡本1962）、今なお茅山式土器の特徴とされている。後に金子直行によって、さらなる検討が試みられ、細分案が提示された（金子1991）。

金子は下部貝層出土土器を茅山系、連続刺突文系、縄文施文系に大別している。茅山系については隆帯で文様帯を区画する隆帯文系、鋸歯状文系、区画された口縁部文様体内に垂線が施文される垂下文系、格子目

文系、条痕による施文がなされる条痕モチーフ系、口縁部が何らかの要素で区画される区画線文系、条痕のみの条痕文系に分類した。連続刺突文系は所謂粕畑式土器とその影響を受けたものについて、刺突列の数などによって5類に分類した。縄文施文系は区画線の種類やその他の施文方法などによって分類している。

また、野内秀明も第一貝塚と第二貝塚の比較によって、茅山上層式の細分案を提示している(野内1999)。野内は第二貝塚の様相について、「早期の包含層をなす堆積層は下部貝層(5層)を中心として、貝層下土層であるXII層、貝層の断続的な崩壊堆積層と考えられた4層、4層および5層直上を覆っていた3層である」と述べ、出土土器については、野島式・鶺鴒台式は出土せず、絡条体圧痕文や円孔文、爪形文などを施す土器は出土量も少なく、早期末葉・擦痕文土器群に包括されるもので型的にも分離されるとしている。また、第二貝塚の出土土器の様相は第一貝塚と類似していると述べている。

ここでは、金子の分類を基に、第二貝塚のXII層、3層～5層の資料を扱っていく。

(1) 隆帯文系(第1図1・2)

1は屈曲部に隆帯が巡り、その上部へ太沈線による格子目文が施される。2は屈曲と隆帯によって文様帯が区画される。竹管状工具による刺突列が施文される。

(2) 格子目文系(第1図3～5)

3は沈線によって文様帯が区画される。5は並行沈線によって格子目文が施される。

(3) 区画線文系(第1図6～13)

6は竹管状工具による刺突列、7・8は押引文、9～12は短沈線文、13は結節沈線文で区画が施文される。

(4) 条痕モチーフ系(第1図14～17)

14は矢羽根状の条痕が施文される。15は凹線文によって区画され、左傾する条痕が施文される。16は口縁部に左傾する条痕を施文した後、右傾する条痕を、間隔をあげながら施文する。17は渦巻状に施文される。

(5) 垂下文系(第1図18～21)

18は竹管状工具による刺突列が横位に巡り、同様の刺突列が1条垂下する。19は波状口縁に沿って刺突列が巡り、波頂部から2条1単位の刺突列が2組垂下する。20は口縁部に沿って短沈線文列が2条巡る。21は環状把手の下部に刺突列による区画線が施され、内部に貝殻腹縁文が縦位に施文される。

(6) 連続刺突文系(第1図22～29)

22は棒状工具による刺突列が1条巡る。23は竹管状

工具による刺突列が2条巡る。24は波状口縁に沿って2条の刺突列が巡る。25～27は押し引き状の刺突列が巡る。28は4条の施文が横位方向に巡り、上位より短沈線文列、結節沈線文列、刺突文列、刺突文列の順で施文される。いずれも竹管状工具によるものである。29は報告では早期末葉・擦痕文土器に包括するとし、茅山上層式とは分離して考えているが、雷下遺跡で類似する土器が多量に出土したためここで扱う。波状口縁を呈し、外反する。施文は外反し始める部分にされるが、内面まで貫通する円孔は一つのみであり、内面が剥離したものと考える。また、刺突の形状は楕円形を呈する。

3 雷下遺跡出土の土器(第2～5図)

雷下遺跡からは茅山上層式から所謂下沼部式にかけての土器が貝層及び各間層から出土している。なかでも第5貝層は遺構・遺物ともに他の層位を圧倒する出土量であった。このうち、雷下遺跡第5貝層出土土器の中から茅山上層式として分類した、第1群第5類第3種の有文土器、第4種の口縁部に円孔文及び突瘤文を施す土器と下沼部式として分類した第6類第5種の貝殻腹縁文を施す土器について金子の分類を基に見ていこう。ただし、多くの類例が確認された、口縁部に円孔文及び突瘤文を施す土器と貝殻腹縁文を施す土器は金子の分類には当て嵌めるには難しく、別系統として分離できると考えられる。ここでは、貝殻腹縁文系、円孔文系として別系統として扱っていく。

なお、下沼部式として報告した、刻みを施した隆帯を巡らす土器や口縁部に交互押捺を施す土器、口縁部を折り返す土器、絡条体圧痕文を施す土器、縄文を施す土器なども本層位から出土している。これらの土器は客体的な出土状況であり、吉井城山でも類例が少ないため、本題からは除外しておく。

(1) 隆帯文系(第2図1～6)

隆帯を施す土器をまとめてみた。本系統の資料は少なく、図示したもので全てである。また、金子の分類とは異なり、いずれも口縁部文様帯を持たない。1は口縁部に沿って隆帯を巡らし、部分的に短隆帯を垂下させる。また、隆帯上に刻みを施す。2は口縁部に隆帯を巡らし、その下部へ貝殻腹縁文を施す。3は口縁部に沿って隆帯を巡らせる。4は胴部破片である。横位の隆帯を巡らし、隆帯上に貝殻腹縁による刻みを施す。第3貝層以上で多く見られ、本層位では唯一の出土例である。混入の可能性はある。5は波状口縁の波

頂部に環状把手を施し、そこから短隆帯を垂下させる。6は刻みを施す隆帯を横位に巡らし、文様帯を区画する。また、文様帯を分割するかの如く、縦位の短隆帯も施される。区画内部には沈線による鋸歯状文が施される。

(2) 鋸歯状文系 (第2図7~13)

7~11・13は沈線によって施文される。9は口縁部でなく、刺突列によって区画された胴部の文様帯に鋸歯状文が施文される。10は太い沈線となる。11は外反する口縁部を呈し、2条の横位の沈線によって区画される。区画の上部には右傾する貝殻腹縁文が密に施される。12は押引文によって鋸歯状文を施す。13は半截竹管による押引文で区画し、内部に鋸歯状文を施す。押引文は文様帯を分割するように縦位にも施文される。

(3) 格子目文系 (第2図14~17)

14は胴部に半截竹管による押引文によって施文される。15は条痕を一定の間隔を開けながら施文することで格子状に施文する。16、17は貝殻腹縁文によって格子目文を施す。17は沈線によって文様帯を区画し、区画上部に施文する。

(4) 区画線文系 (第3図18~24)

18は太い沈線が胴部に巡らされる。19~22は押引文によって施文される。21は口唇部直下に押引文が巡る。23は並行沈線による区画が施される。24は竹管状の円形工具による刺突が巡る。

(5) 条痕モチーフ系 (第3図25~34)

25は地文に対して交差するように縦位方向に間隔をあけて施文し、格子目状の文様を描出する。26は右傾する条痕を、間隔をあけながら施文する。27・28は横位の地文に対して左傾する条痕を、間隔をあけて施文する。29は地文として左傾する条痕を施した後、横位方向の条痕を施す。30・31は様々な角度へ煩雑に施す。32は左傾する条痕の後、右傾する条痕を部分的に施す。33・34は曲線状の施文を施す。

(6) 連続刺突文系 (第3図35~38)

後述の円孔文系とは異なる施文具もしくは施文方法を用いる土器を連続刺突文系としてまとめた。35は棒状施文具で3列の刺突を横位方向へ巡らす。36はヘラ状施文具、37は竹管状施文具による刺突を1列巡らす。38は爪形文を山形に施す。

(7) 垂下文系 (第4図39~45)

39~41は半截竹管による押引文が施される。39・40は2~3条を1単位に施文する。41は口縁部に刺突文が巡らされ、内面に押し膨れができる。42はヘラ状施

文具によってやや左傾する施文がなされる。43は沈線文が間隔をあけながら施され、横位の区画施文もなされる。44は集合沈線が施文され、横位の区画施文もされる。また、波状口縁に沿って円孔文を加える。45は条痕による垂線が密に施される。

(8) 貝殻腹縁文系 (第4図46~53)

46・47、52・53は縦位の貝殻腹縁文が施される。47は口縁部に縦位と横位の貝殻腹縁文によって文様帯が描出される。条痕のみの無文帯を挟み、胴下半部には格子目文が施される。52・53は口縁部に円孔文を加える。52は貫通させずに押し膨れが出来たところで止めているが、53は内面まで貫通させる。48~51は斜位の貝殻腹縁文が施される。48・49は左傾、50・51は右傾した刺突が巡る。

(9) 円孔文系 (第5図54~74)

本系統の土器は所謂突瘤文土器である。施文技法によって3種類に分けられ、いずれも外面から棒状工具によって器面に対し直角方向に刺突を施す。A:刺突を内面まで貫通させるもの、B:内面に押し膨れができ、あわや貫通するかというところで止めるもの、C:通常の刺突文のように表面に凹みができる程度でとめるものの3種類である。多くは条痕文のみだが、前述の44、52、53のように他の施文を施した後に円孔を加えるものもある。54~61は円孔文を内面まで貫通させる。円孔文は5mm~20mmほどの間隔で施される。62~68は円孔が貫通する寸前で止め、内側に押し膨れができる。65・66は内面まで貫通しているようだが、剥落によるものであった。69~74は口縁部に刺突列を巡らす、内面までは影響が見られない。

4 小結

以上、吉井城山貝塚第2貝塚XⅡ層、3層~5層および雷下遺跡第5貝層出土土器を概観してみた。本稿では扱っていないが、両遺跡とも単純な深鉢形を呈し、条痕文のみの土器が大半を占める。また、吉井城山貝塚第1貝塚でも約6割が条痕文のみの土器であり、該期の大多数は施文に乏しいことは周知の事実であろう。有文土器では隆帯文系、鋸歯状文系、格子目文系、区画線文系、条痕モチーフ系、連続刺突文系、垂下文系、貝殻腹縁文系、円孔文系の施文パターンが確認された。従来から認められてきた施文パターン及び技法であり、遺跡間の共通性を追認する形となったが、隆帯文系、鋸歯状文系、連続刺突文系、貝殻腹縁文系、円孔文系などにおいては量的な差異が見られた。

(1) 隆帯文系について

本系統の土器では、両遺跡での様相が大きく異なる。吉井城山貝塚では強い屈曲を有する土器（第1図1・2）に限られ、器形及び、施文に太沈線や竹管を用いており茅山下層式と考えられる。雷下遺跡では、金子の分類基準とは異なり、文様帯を持たず、施文は口縁部に巡る隆帯ないし垂下する短隆帯のものに限られる。これらは茅山上層式と考えられ、施文方法、時期共に異なっている。雷下遺跡からも茅山下層式土器は出土しているが、上位層から下位層の各層位から散漫に出土し、いずれも破片資料に限られる。

(2) 鋸歯状文系について

本系統の土器は、茅山式土器全般において見られる代表的な施文パターンである。施文は稜や区画線文によって区切られた文様帯内部に施される。吉井城山貝塚では、本系統の出土例がなかった。雷下遺跡では、幅の狭い文様帯へ施し、区画線をもたないものもある。また、いずれの土器も稜をもたない。

茅山上層式の器形の特徴として、野鳥式～茅山下層式にかけて特徴的だった稜や括れが弱まり、直線的な深鉢となる。それに伴い、文様帯の幅も次第に狭まる。雷下遺跡の例はこの特徴と類似することから、茅山上層式内でも新しい段階のものと考えられる。

(3) 連続刺突文系について

金子は連続刺突文系土器を茅山下層式から茅山上層式へと変遷を辿れる型式とし、I期～V期の5段階に分けている（金子1991）。吉井城山貝塚では2列施文が多く、4列施すもの（第1図27）もある。27は緩い括れを持ち、連続刺突文のみで文様帯を区画し、ハツ崎I式に相当する連続刺突文系のⅢ期と考える。雷下遺跡では連続刺突文系の出土例が少ない。第3図38は爪形文を山形に施し、粕畑式への移行期ないし古い段階と考えられ、連続刺突文系のⅣ期と考えられる。

(4) 貝殻腹縁文系について

従来、貝殻腹縁文は茅山上層式における施文方法の一つとして認識されているが、類例も少ないことから看過されてきた施文と言える。一方で、貝殻腹縁文を山形や格子目状に施文する打越式については、系譜を辿る論考など多くみられる。雷下遺跡では、貝殻腹縁文を口縁部に縦位や斜位に施す土器が、少量であるが下位層の青灰色砂層でも出土しており、第5貝層に最も出土量が多い。また、上位層でも他の下沼部式土器と伴出し、同等の出土量である。

上記の出土状況に加え、下沼部式として報告してい

る土器群でも貝殻腹縁文は多用されている。特に第4図47の胴部文様は茅山上層式と考えるには難しく、むしろ打越式の文様を連想させるものである。

上記のような状況を鑑み、貝殻腹縁文系は茅山上層式の範疇に収めるのではなく、下沼部式期にも存続し、打越式への変遷を埋め得る可能性を孕んだ系統として検討を要すると考えられる。

(5) 円孔文系について

円孔文系は雷下遺跡を特徴づける系統の一つである。本系統の土器の存在は八幡一郎や赤星直忠、池田次郎などによって古くから指摘されており、近年では毒島正明によって茅山上層式に伴う系統の土器として子母口式の中六類型との比較がなされている（毒島2016）。

毒島は茅山上層式期の特徴として、「条痕を表裏に施文し、繊維を多く含んでおり、口唇部にも刺突、刻目がある。ただし、口唇部に絡条体圧痕文施文がないことと、器面調整で表裏条痕施文が多く、無文・擦痕施文がないことが「中六類型」との違いを見分ける目安になる」と述べており、雷下遺跡の例も同様である。本系統の施文技法は草創期や早期の子母口式にも見られるが文様の系譜は明らかでない。また、雷下遺跡からは子母口式と考えられる土器は確認できておらず、早期末葉にも現れる技法の一つと考えられる。また、他遺跡の類例が乏しく、その出自や系統をどこに求めるのか、検討が必要である。

雷下遺跡における円孔文系の土器は、下位層の青灰色砂層より出土し始め、第5貝層をピークに急激に出土量を減らし、上位層ではほとんど見られない。茅山上層式の出土量のピークも第5貝層にあり、やはり本系統の土器は茅山上層式の範疇に収まるものであろう。今後の課題として、雷下遺跡内での変遷を明らかにした上で、他遺跡との検討が必要だろう。その際、本系統の示準とすべく、仮に「雷下類型」と呼称したい。

ここでは、本類型の大まかな特徴をまとめる。施文は、前述の通り、円孔の貫通度合いによってA：刺突を内面まで貫通させるもの、B：内面に押し膨れができ、あわや貫通するかというところでとめるもの、C：通常の刺突文のように表面に凹みができる程度でとめるものの3種類に分けられる。また、円孔の形状はほぼ真円形となる。文様帯はほとんど構成されないが、第4図44、52、53のように垂下文を施すものもある。口縁部は緩やかな波状口縁を呈するものが多く、口縁に沿って円孔を巡らす。口唇部へは刻みを施すものが多い。円孔は1列が大半を占めるが、第5図74のよう

に2列のものもある。器形は全形が明らかな資料が少ないため断定はできないが、稜や段をもたない尖底ないし小平底の深鉢形を呈する。

吉井城山貝塚の出土例では、刺突を貫通させる直前で止めるものようであるが、内面に押し膨れはできていない。また、円孔が楕円形を呈し、雷下類型とは様相を異にしている。

5 まとめ

上記のように、吉井城山貝塚第2貝塚Ⅱ層、3層～5層と雷下遺跡第5貝層の間には、時期差があると考えられる。

隆帯文系及び連続刺突文系では、吉井城山貝塚の出土例に茅山下層式期の特徴を有する土器が認められた。吉井城山貝塚は先述のとおり茅山下層式から茅山上層式にかけての変遷が認められる遺跡であり、その結果を追認できた。一方、雷下遺跡では、茅山上層式期および並行段階の特徴が認められた。また、鋸歯状文系においても、雷下遺跡の出土例が茅山上層式期の特徴をもつものに限られており、雷下遺跡の第5貝層は茅山上層式の段階にあると言えよう。

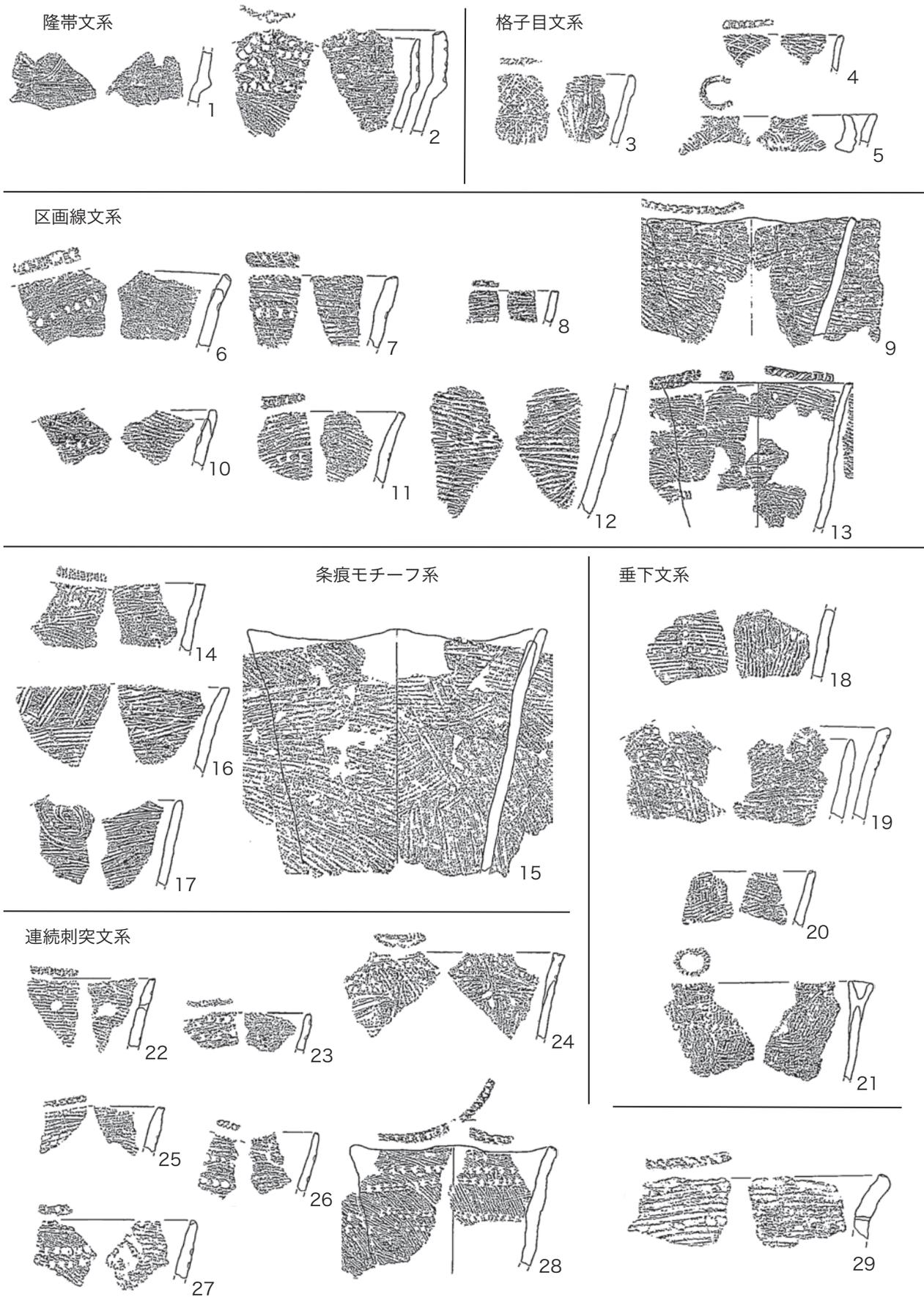
貝殻腹縁文系は、茅山上層式だけでなく所謂下沼部式が主体となる層位まで出土し続け、施文技法としても、下沼部式の各種において用いられる。一方で、鷓鴣島台式や茅山下層式段階における類例はほとんどない。このことから、本系統は茅山上層式の中でも比較的新しい段階から見られる施文と考えられる。このことは吉井城山貝塚の主体が茅山下層式から茅山上層式への様相を見せ、本系統の出土例が乏しいことに対し、雷下遺跡では茅山上層式から下沼部式への様相を呈する中でまとまりを持って出土するという点においても合致する。

円孔文系は、類例が乏しく、時期の比定を行うことができなかったが、他の系統の様相より茅山上層式期に属する系統と考えられ、系統としての特徴を抽出できた。今後の課題として、茅山上層式期における「雷下類型」として確立できるか、遺跡内での層位的な検討を進め、他の類例との検討を行っていきたい。

引用・参考文献

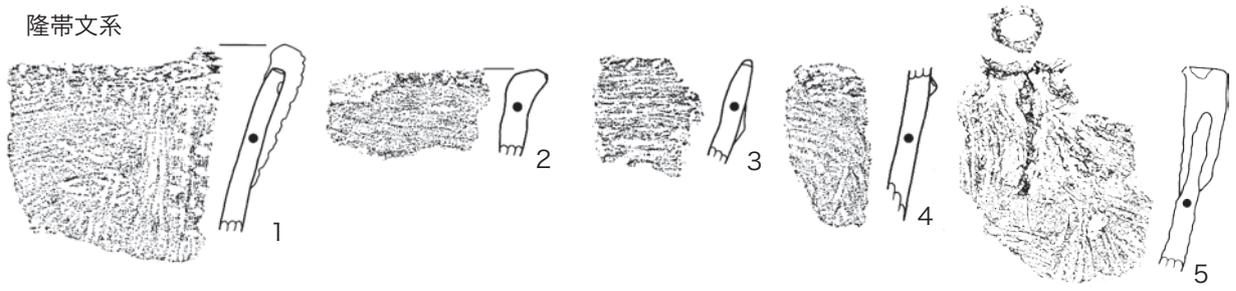
赤星直忠 1937「神奈川縣三浦郡吉井貝塚調査」『史前学雑誌』第9巻6号 赤星直忠・岡本勇 1962「横須賀市吉井城山第一貝塚調査概報(一)」横須賀市博物館研究報告(人文科学)第6号 安孫子昭二 1982「子母口式の再検討—清水柳遺跡第二

群土器の検討を中心にして—」『東京考古1』東京考古談話会同人会 荒井幹夫 1983「早期末葉の貝殻腹縁文土器の実態とその編年」『人間・遺跡・遺物 わが考古学論集1』文献出版 池田次郎 1950「城台貝塚出土早期縄文土器の細別」『広島県立医科大学論文集』第2集 小崎晋 2003「下沼部式の一考察—縄文時代早期末葉における東海西部～南関東にかけての土器の相互関係—」『山口大学考古学論集』近藤喬一先生退官記念事業会 神奈川考古同人会縄文研究グループ編 1983「シンポジウム 縄文早期末・前期初頭の諸問題 土器資料集成図集」『神奈川考古17』金子直行 1991「茅山上層式の再検討」『埼玉考古学論集 設立10周年記念論文集』(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団 金子直行 2008「条痕文系土器」『総覧縄文土器』総覧縄文土器刊行委員会 縄文セミナーの会 2000『第13回縄文セミナー 早期後半の再検討』谷口康浩 1984「打越式土器」の再検討」『東京考古2』東京考古談話会 (公財)千葉県教育振興財団 2017『東京外かく環状道路埋蔵文化財調査報告書12—市川市雷下遺跡(5)・雷下遺跡(6)・松戸市上矢切南台遺跡(9)—』千葉県教育振興財団調査報告第768集 (公財)千葉県教育振興財団 2019『東京外かく環状道路埋蔵文化財調査報告書14—市川市雷下遺跡(1)～(4)・(7)～(10)—』千葉県教育振興財団調査報告第780集 野内秀明 2001「条痕文土器群後半期の諸段階—茅山下層式・茅山上層式土器とその周辺の土器群—」『考古論叢 神奈川第9集』神奈川県考古学会 毒島正明 2009「子母口式古段階の土器について—峠遺跡出土土器を中心として—」『竹石健二先生・澤田大多郎先生古希記念論文集』毒島正明 2016「西上総の子母口式古段階—中六遺跡出土土器を中心として—」『千葉縄文研究6』千葉縄文研究会 古谷健一郎 1984「神之木台式・下吉井式土器の変遷」『—甲斐丘陵考古学研究会会報—丘陵』甲斐丘陵考古学研究会 宮崎朝雄 1987「関東地方における縄文早期終末の土器群について」『埼玉の考古学』柳田敏司先生還暦記念論文集刊行委員会 山下勝年 1993「粕畑式・上ノ山式・入海0式土器の再検討—知多市二股貝塚出土土器を中心とした縄文早期後葉の土器型式の再編—」『知多古文化研究—7 伊勢湾・三河湾文化特集—』知多古文化研究会 山下勝年 2008「東海条痕文系土器」『総覧縄文土器』総覧縄文土器刊行委員会 八幡一郎 1936「北海道の突瘤土器」『考古学論叢』第2輯 八幡一郎 1938「再び突瘤土器に就いて」『考古学論叢』第9輯 横須賀市教育委員会 1999「吉井城山—神奈川県指定史跡吉井貝塚を中心とした遺跡—史跡整備事業に伴う確認調査の記録—」横須賀市文化財調査報告書 第34集

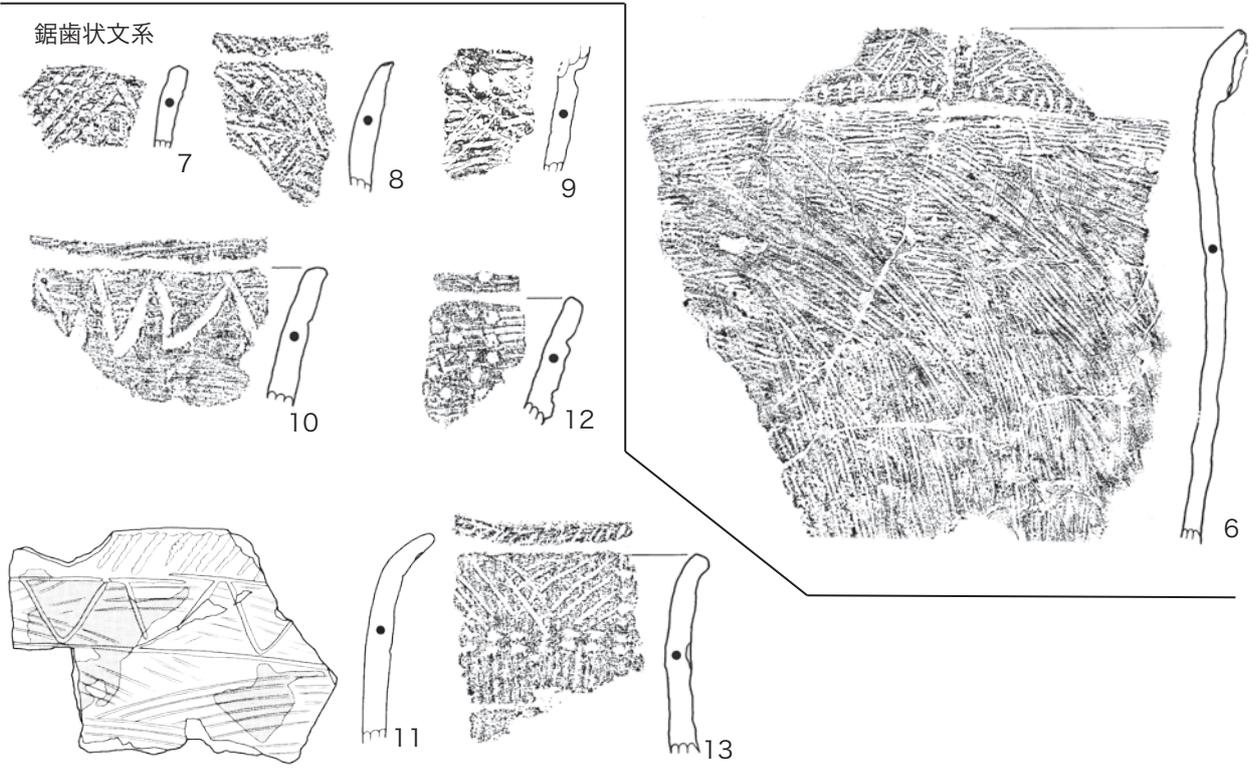


第1図 吉井城山貝塚第二貝塚出土土器

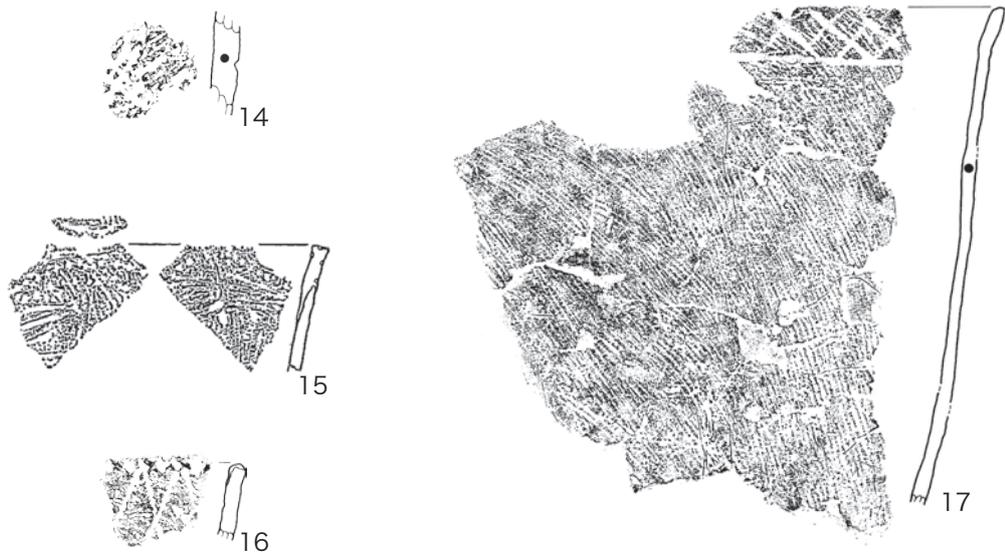
隆带文系



鋸齒状文系



格子目文系

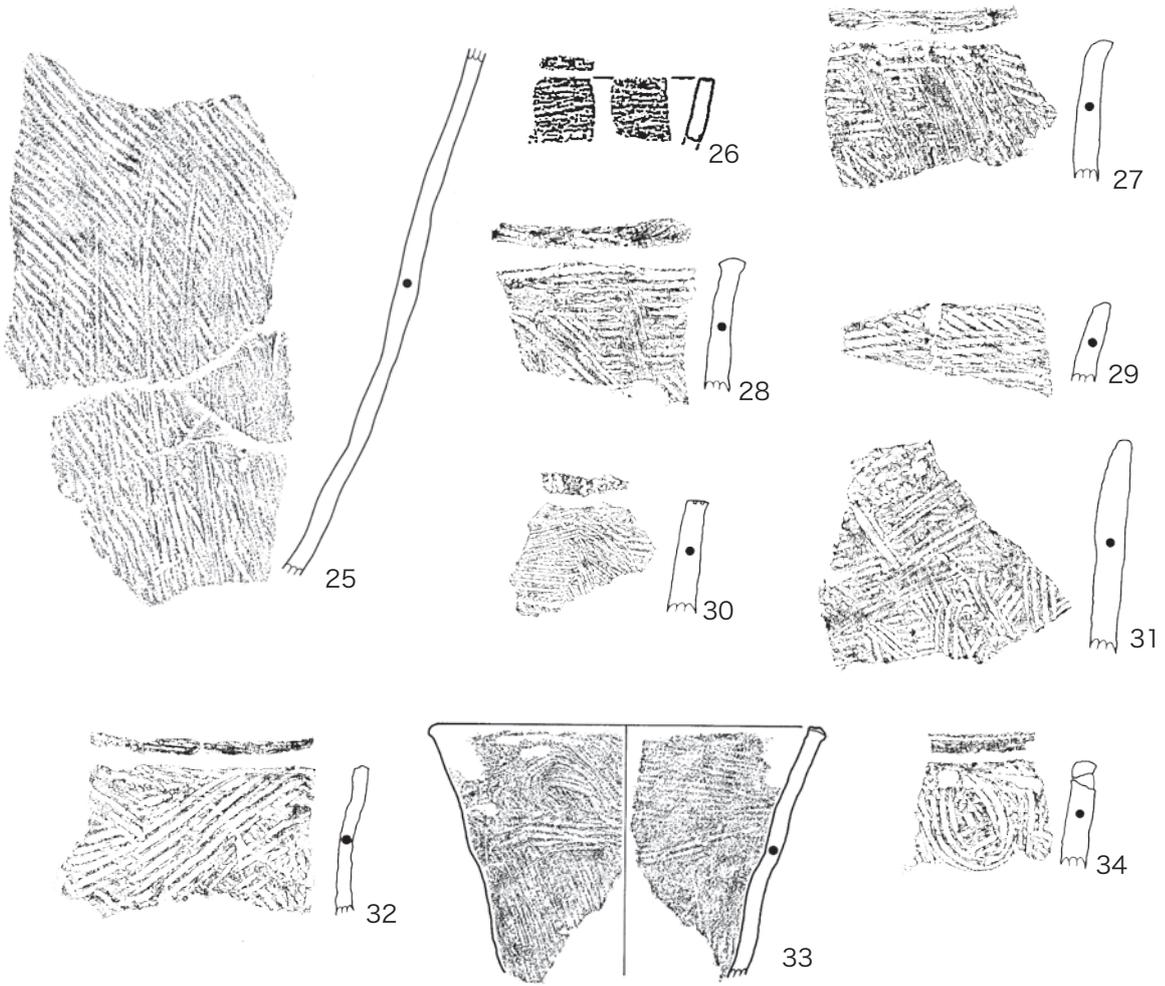


第2図 雷下遺跡 隆帯文・鋸齒状文・格子目文系土器集成

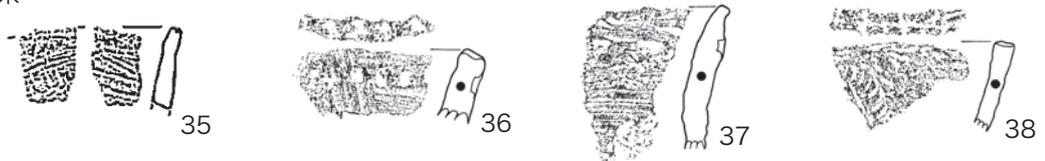
区画線文系



条痕モチーフ系

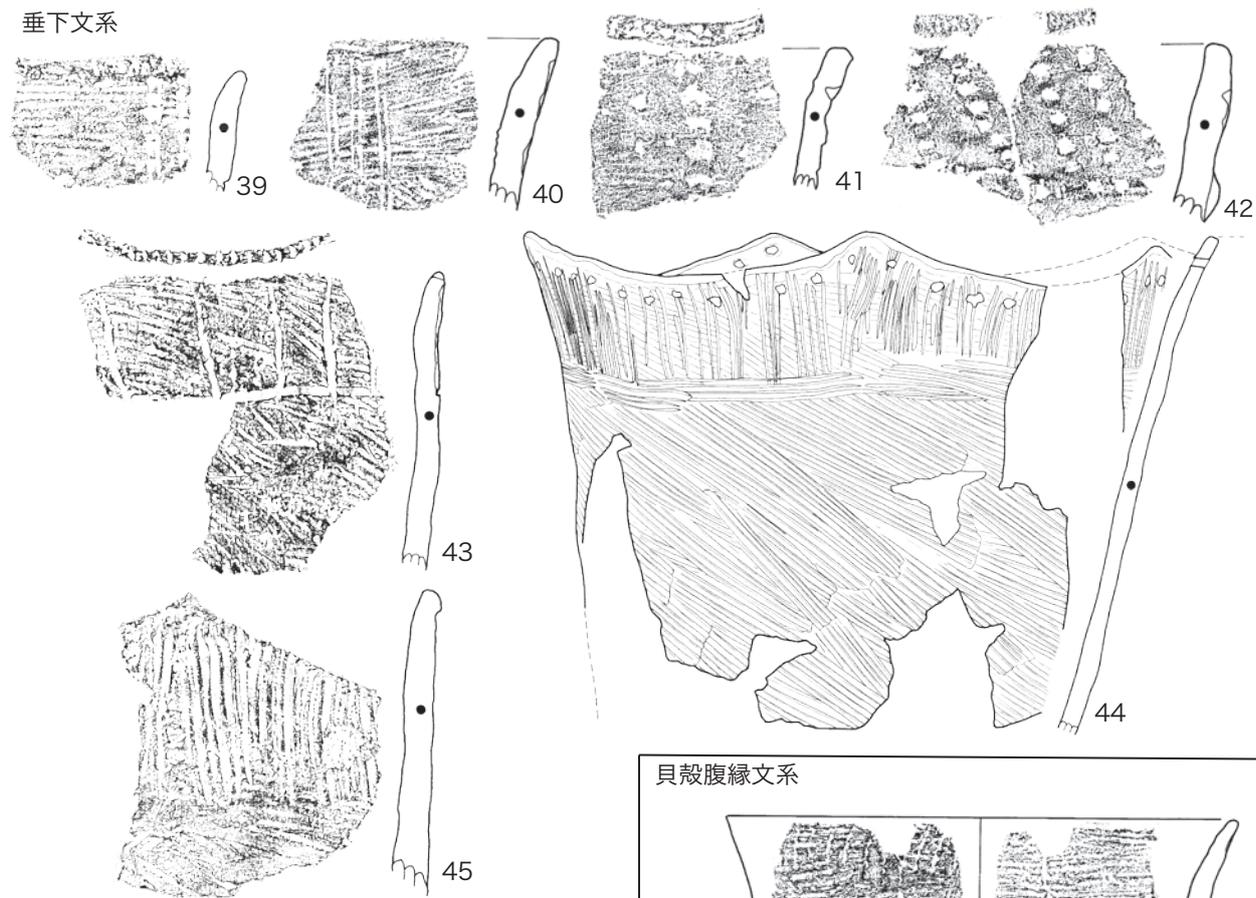


連続刺突文系

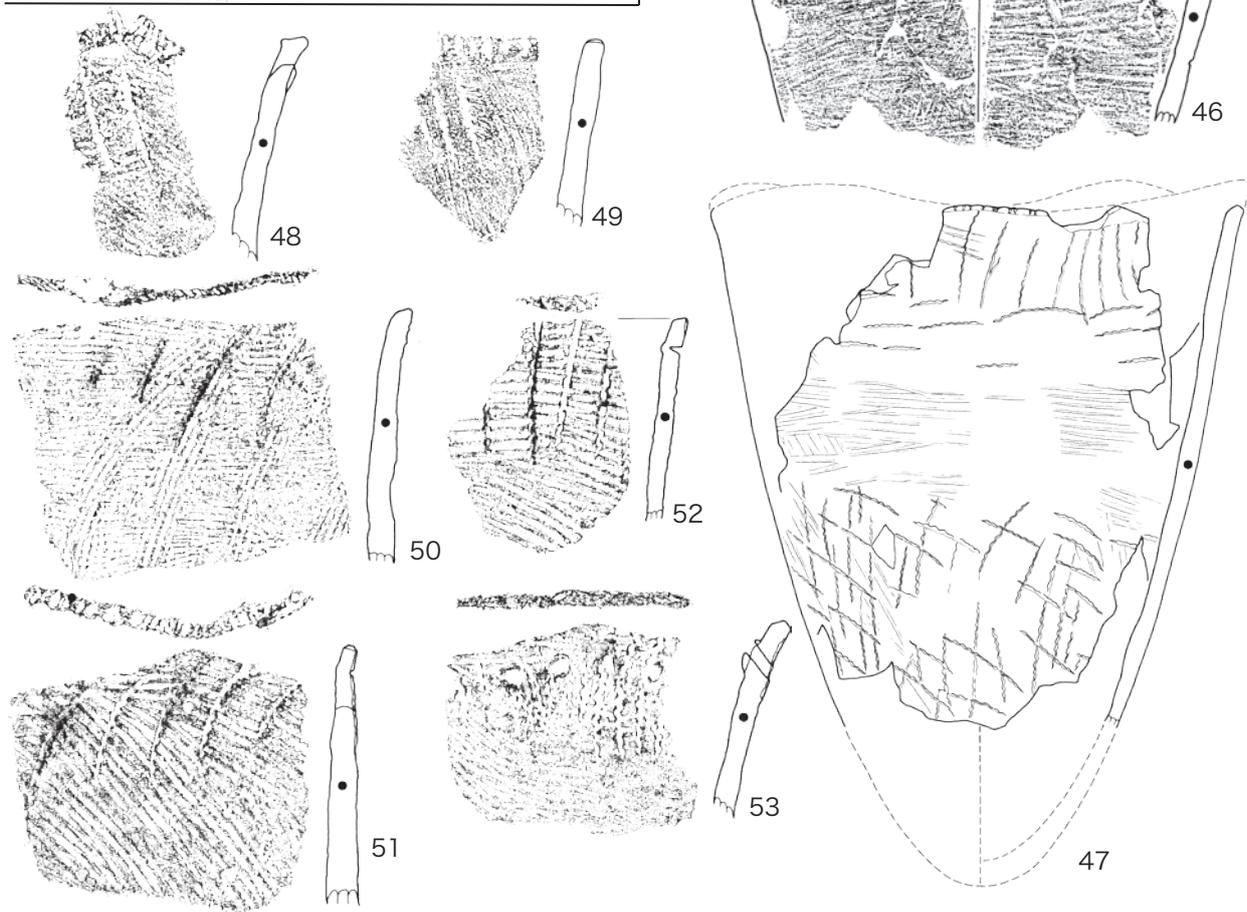


第3図 雷下遺跡 区画線文・条痕モチーフ・連続刺突文系土器集成

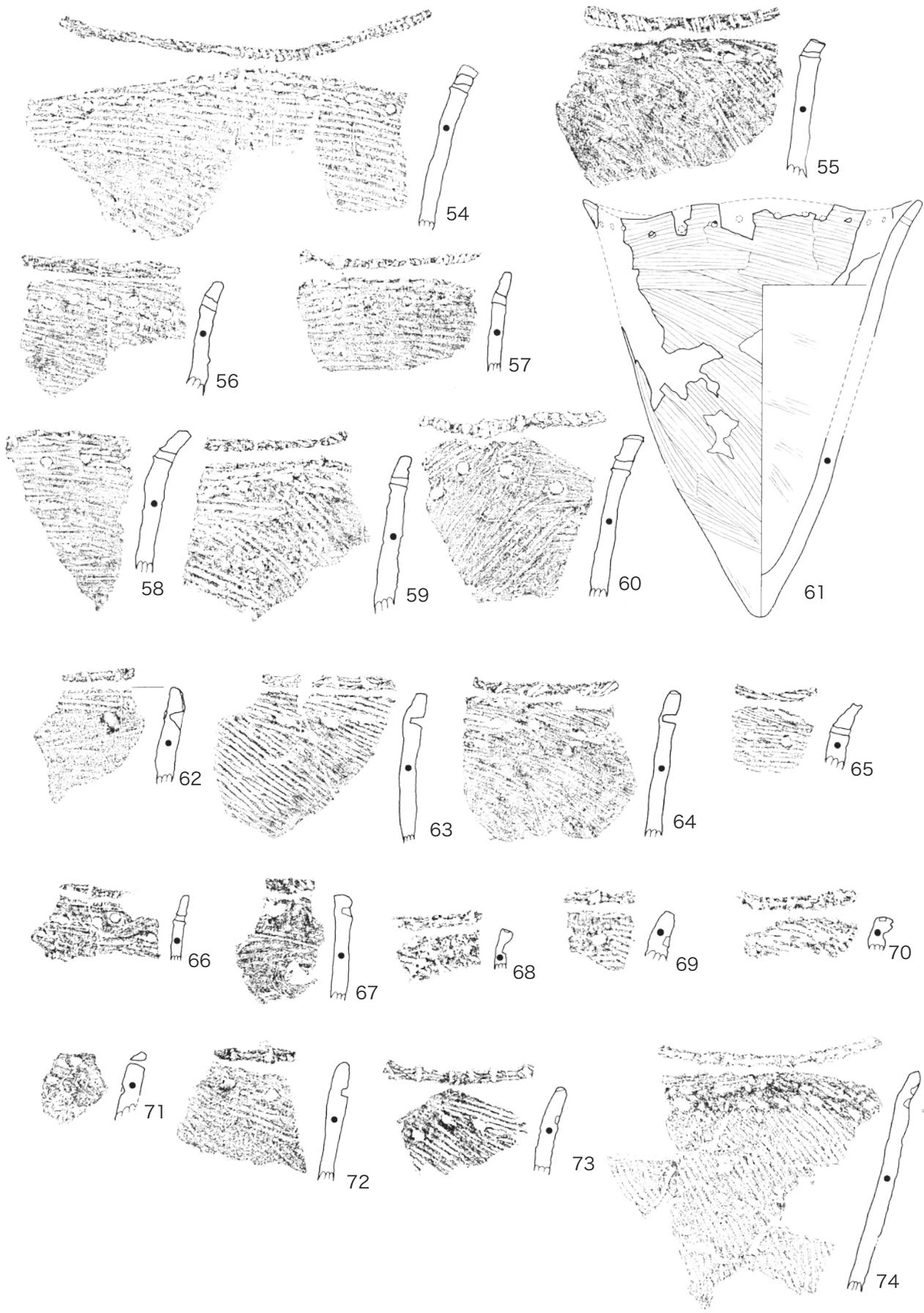
垂下文系



貝殼腹緣文系



第4図 雷下遺跡 垂下文・貝殼腹緣文系土器集成



第5図 雷下遺跡 円孔文系土器集成